

映画『銅鼓と送魂—広西省南丹県 <sup>ペークー</sup>白褲 ヤオの葬式—』 北村皆雄

中国の広西省壮族自治区北部、貴州省との省境に近い南丹県の山岳地帯には白褲（ペークー）ヤオが居住する。中国ではヤオ族の支系とされているが、習俗の類似、文化・神話の共通性、銅鼓の使用や世界観からみて、むしろミャオ族の系統と考えた方がいいとの最近の研究もある。発表者は2004年10月から11月にかけて、入国の極めて難しいこの地を訪れ葬式を撮影した。この葬式は、2000年以上前に中国西南部から東南アジアにかけて隆盛した青銅楽器「銅鼓」の音で、死者の魂をあの世に送るものであった。一斉に哭く女性たちの声は村落に広がり、供犠される水牛には男も加わり慟哭する想像を超えた葬儀であった。死と豊穡を結ぶもの、性別を持つ生命体とみなされる銅鼓とは何か。20数個の銅鼓の演奏を指揮する木鼓も登場する。

【銅鼓の世界】

銅鼓は紀元前4世紀頃（紀元前7世紀まで遡るといふ説もある）に中国西南部（雲南昆明周辺）に最初に現れ、東南アジアまで広がった青銅製の打楽器、金属鼓である。南中国と東南アジア＝ラオス・カンボジア・タイ、ビルマ（ミャンマー）では、なお生産し使われ続けている。宗教的慶事の祭器、葬式、雨乞い、病気の治癒祈願、村人の招集合図などに用いられ、雲南省や北ベトナムでは墓から出土している。有力者や首長の副葬品として墓に入れられた。富や権力を示すもので呪力、辟邪の力があると信じられていたと思われる。

銅鼓全体の表面には図像や文様が描かれている。舟・家屋・動物・人物・羽人（シャーマン）・太陽紋、星形紋・雲雷紋などである。同心円は宇宙を表したものと思われる。

銅鼓は一つの生命体として認識される。文様に描かれた世界に影響力を持つもので、音を通して働きかける。葬儀で使う銅鼓は、あの世とこの世をつなぐものとして登場する。文様の舟は、この世とあの世を行き来する交通手段として観念される。

取材した中国広西壮族自治区南丹県のペークーヤオ族は、葬式の送魂儀礼に必ず銅鼓を使う。死者の魂が銅鼓の音により無事あの世に送り届けることを願うのである。昔は山上の洞窟に安置して保管したが、現在は家屋の寝台の下に保管するのが多い。

葬式において稲穂が重要な要素として登場する。銅鼓と稲とは特別な結びつきがあるように見受けられる。＜雷が鳴るころ亡くなると秋まで葬式はできない＞との禁違があるのは、正月15日以降9月3日までの農耕期には、銅鼓を絶対叩いてはいけないとされるからだ。この時期に銅鼓を鳴らさないのは、強い宗教的な意味があるのではないか。ペークーヤオ族の葬式には、天地開闢の兄妹相姦神話や創世神の猿も登場し、号泣が山野に響き、涙と泣きの文化が壮大なスペクタクルとして展開する。